

第2回東大阪市立新博物館整備基本計画審議会 議事録

開催日時	令和6年2月5日（月） 13時30分から15時30分
会場	東大阪市役所 18階会議室1・2
出席者 審議会委員	鈴木会長、大西委員、中村委員、弘本委員、村上委員
配布資料	・新博物館基本計画資料 ・文化複合施設整備基本計画_平面図 ・東大阪市文化財収蔵資料

1 開会

委員5名全員出席につき、東大阪市立新博物館整備基本計画審議会規則第5条第2項の規定により審議会は成立することを報告。

2 案件

(1) 新博物館整備基本計画について

- ・事務局および基本計画策定事業者のトータルメディア開発研究所より、基本計画の全体像（章立て案）を説明。
- ・事務局および基本計画策定事業者のトータルメディア開発研究所より、基本コンセプト・ターゲット像・新博物館の事業活動方針・諸室機能構成の検討段階案について説明。

《会長》

- ・検討内容を聞くと、県立博物館の規模くらいのイメージに感じた。スペースとしては平面プランを意識して絞っていくのだと思うが展示としても施設として総花的になりすぎず、東大阪市に特化したものを選択する必要がある。
- ・来訪者・想定する利用者像で子どもをターゲットとすること。博物館で子どもをターゲットというのは、非常に大胆な発想と思う。具体的に小学生の何年生を対象などは考えているか？
- ・委員のみなさんの経験をもとに、大枠賛成、あるいは難しいかななどご意見いただきたい。

《委員》

- ・まだ日本国内で十分に実現していないのが「子ども」への働きかけ。どの博物館がこうだという事例は上げづらいのが現実。
 - ・国外、例えば韓国などは取り組みが進んでいる。
- ソウルの国立中央博物館や百済、慶州、済州島の博物館などにキッズミュージアムとして、博物館の展示室とは別に未就学児やファミリー層も対象にした展示空間があり、（地域や文化の）成り立ちなどを簡単な絵や道具で説明したりしている。
- 済州島の海女博物館であれば、キッズ海女博物館があり、海女の仕事をボールプールや釣りのおもちゃなどで疑似体験をして魚を取ること、その文化に対する興味を惹くということをしている。

もしよければ、次回委員会で現地の写真などお見せするので、参考イメージにしていいただいても良いと思う。

- ・国内で一番近いことをやっているのは兵庫県立考古博物館で、子ども向けの展示も含まれているが一つの展示で両立させていくのは難しいように感じた。

- ・小中学生に向けた展示コーナーは、一般の常設展示でも十分対応両立できる。

- ・より小さな子どもたちには、遊びから学習へというのが教育の基本になるが、遊びという要素を強く持たせていくときには従来の博物館の考え方から言うと相容れない部分がある。

- ・逆に言えば、メインターゲットにある未就学児・ファミリー層と小中学生は、別の展示として展示空間ごと切り分けて考えた方が良いと思う。

《会長》

- ・韓国では、キッズミュージアムが定着しているが日本では定着せず事例がない。それをあえて東大阪市が先鞭を切ってやるかどうか。

- ・前回もお話ししたが、奈良国立博物館で親と子の仏像教室を行ったときは、子ども向けにしゃべるから、子どもを連れてくる関心のある親はとてもよく理解できるが、子どもの関心や理解に十分に達しているかは難しいという経験があった。

- ・キッズミュージアムと小中学生の展示を別としたときに。展示面積が広ければできるが、狭いとどちらかを選ばなければならないという問題になってくる。

- ・（「子ども」をメインターゲットにすることに）やるという面と問題となる面があるので、今日だけでは結論を出せないかもしれない。

- ・ぜひ次回、中村先生と事務局で韓国の事例を簡単にご報告いただきたい。

《委員》

- ・博物館ではなくて音楽や演劇といった文化政策分野では、アートスタート事業といって、未就学児がアートに触れるという動きが活発になってきている。

東大阪市でもその動きは始められているかと思うので、館全体をあげてとならずとも、プログラムとして提供することも含めて考えていく必要はある。

- ・例えば、料金を払わずに入れる公共的なオープンスペースがあり気軽に参加できる活動があるとか、親子で散歩の途中に立ち寄って遊んでいくことが出来るスペースが用意されているとか、子連れ参加が可能なプログラムを定期的に市民に提供していくとかはしてもいいし、すべきと思う。

《委員》

- ・未就学児層だと、展示資料に直接触れるというのは安全性の問題もあるので、例えば、東大阪の企業がつくっているカーペンターブロックのような玩具を使って何かを作って遊んでみるようなプログラムなどは、安全も保ちながらできるのではないかな。

《会長》

- ・ものづくりのまちを生かした展示・プログラムと合わせた方向性のご意見には賛成。
- ・未就学児を対象とする基本的な課題として、幼稚園児の頃の記憶や経験はなかなか残らないものであるが、そこに対して博物館が取り組むことが効果的なのか。

潜在意識をつけるために大事という理解のうえで、韓国など海外含めて、効果をどう評価していくのか。そもそも普通の学芸員では専門分野も違うので対応しきれないのではと思う部分もある。

《委員》

・（海外事例でも、）未就学児に対しては保育士や教員といったスキルを持った方も参加して進められているように思う。

・記憶に残るのかという点においては、幼稚園くらいの年齢の記憶は残っていたりする。自分が幼稚園の時にそのような博物館はなかったのも、もちろん博物館の記憶は無いが、ないものは残りませんから。そういう意味では、残していく、残してあげるのが我々の役割かもしれない。

《会長》

・目標に掲げたはいいものの、活動としてやり遂げられるかという面では、未就学児ターゲットをどう扱うかが一番の問題でしょうか。

・サブターゲットの「市民・観光客」に対して、企画展示や常設展示において東大阪の魅力を発信するとあるが、こちらを具体化していくうえでのご意見はどうですか。

《委員》

・観光協会目線で、特別観光地化されていないところは魅力と思う。昔ながらの商店街が残っていて普通の暮らしが分かりやすいこと、ものづくりの拠点であること。

修学旅行生もたくさん受け入れ、ものづくりの原点を知ってもらうきっかけになっている。

・神話の伝承が残っていたり、古いものと新しいものがごっちゃにあるのも魅力のひとつ。

《委員》

・歴史や文化の交差点というニュアンスを持った土地だと思う。例えば、歴史的なところだと鴻池新田とか石切とか、新しい部分ではものづくりも、そうした混在する文化という面で語ることができると思う。

《委員》

・2委員と共通するが、奈良と大阪の間に位置して古代から現代まで人が行き来してきた河内の文化の層の厚さは感じる。

・大阪という大都市を支える豊かな田園地帯であると同時にものづくりの生産地でもある独特の歴史性や、地理的な基盤が生み出した底力は、物質的な文化だけでなく、現代に息づく地域の結びつきや住民性とも合わせて語れる要素を多く持っている。

《委員》

・新博物館の予定地になる地域周辺は、数年前に野外活動センターが綺麗に整備されてからは、周辺の学校でも地域の方と一緒に自然の森に歩いて一緒に行くプログラムや学校行事などで活発に活用されていて人通りもある。

また、近畿大学をはじめ複数の大学があることで、小学校にも大学生が来て東大阪のものづくりのよさを発信する活動として、ワイヤーアートやねじづくりの講座を行ってくれるなど積極的にかかわってくれている。地域連携の下地があることは魅力づくりにつながると思う。

《会長》

・（歴史的なトピックだけでなく、）現在の東大阪の地域の魅力として、ものづくりの視点は具体的な連携方策をまとめていただきたい。

・自身の活動拠点の奈良では、博物館というと（資料としての）文化財という視点が重視されるが、東大阪市の文化財審議会を経験してそれだけではないと感じている。

菅原さんが定年退職の講演会の時に、東大阪市の文化財のキーワードとして「新田開発」とおっしゃった。大和川の付け替えとかによる影響で少しずつ水が引いて土地ができる。大阪の別の地域でも共通する出来事ではあるが、東大阪であえて新田開発という言葉を選ばれた意味は改めて考えたい。

新田開発も今は全部宅地造成に変わってしまっているが、そういったことも歴史であることを見据えないといけない。

《会長》

・博物館の機能・事業として、通常の博物館機能の4つとともに、「協働・交流機能」を伸ばしていきたいとあげられている。施設としてどのような部屋をもつか、人員は配備できるのかで活動が制約されるのではないか。

・事務局に質問。当初の複合施設として整備していくことで始まった新博物館の構想は市史料室・埋蔵文化財センター・郷土博物館を合併する考え方であった。今回の基本計画はその延長線上と考えるか、それともそれとは切り離して新博物館をつくるということになるのか。

《事務局》

・基本的には郷土博物館、埋蔵文化財センター、旧市史史料室の3施設統合が出発点ではあるが、文化複合施設という旧来の計画とは異なり、今回は独立した新博物館という位置づけ。まだ曖昧な状態での回答になるが、単に統合するだけではなく、新博物館として再構築していきたいという考えを持っている。

「会長」

・この審議会で本計画を複合施設の考え方からは切り離すような結論は出ても構わないのか、3施設の機能は統合し提示することを前提として意見を述べるべきなのか。
具体的には、旧市史史料室の機能を博物館に持たせるのかなど。

「事務局」

・これまで検討で取り組んできたものから全く違うものになりえないし、完全に切り離せるものではないと考えている。
・ご指摘の市史史料室・市史編纂室については、市史編さんは市の一業務としての別個のプロジェクトであり、博物館が抱える機能ではないという考え。旧市史史料室を諸室に数えているのは、古文書資料の展示や活用はぜひ博物館で行っていきたいと考えているため。

「会長」

・市史史料については、博物館が編纂の業務を担うのではなく、博物館の古文書部門の資料として扱うということで明快になった。

「会長」

・教育普及活動としてデジタル分野での対応、収集保存活動でデジタルアーカイブ、データベース化を挙げている。予算もかかることだが、博物館の事業活動としてどこまでやるか具体的な方策はあるか。

「事務局」

・すでに令和5年度から資料のデジタルアーカイブ化の予算を確保し、文化財課の事業として進めている。例えば、常設展で展示する市の目玉となるような文化財、東大阪らしい資料などを中心に2次元・3次元のデジタルデータを取り、アーカイブとしてインターネット上などで公開を進めていく。収蔵品すべてをデジタルデータ化すると膨大な量になるが、目録についてはデジタル管理できるようにする方針。

・文化財課では、旧郷土博物館等が休館となり、収蔵品にふれる機会がないため、博物館が保管する資料を公開する役割でデジタル活用に先行して取り組んでいこうとしていることが現状である。

・新博物館の展示においても、収蔵品、展示品への理解を深めるために360度の3Dデータを解説とともに見れるようにするなど蓄積したデジタルデータは活用していきたい。

・令和6年度も議会の承認はまだ得ていないが、予算化の方向に進んでいる。当面の間は文化財課の事業としてデジタルアーカイブ化を進めていくが、新博物館が出来たときには事業含め統合していきたい。

「会長」

・デジタルアーカイブ化を現状文化財課が進めているのであれば、博物館の事業として移行せずにそのまま文化財課で完遂すればよいのでは？

その分のスタッフが博物館に増えればいいが、業務だけやってくるとなると本来の博物館業務が圧縮される心配が出てこないか。

《事務局》

・博物館法の改正で博物館事業としてのデジタルアーカイブ化の取り組みは努力義務として位置づけられているととらえているので、現時点では博物館業務として資料や目録のデジタル化を担うべきと考えている。

《会長》

・デジタル化とその人員・予算確保は多くの博物館では大きな課題。
博物館がデジタル化事業を行うのであれば、その人員を最初から確保しておく必要がある。

《委員》

・和歌山県立の近代美術館、県立博物館、紀伊風土記の丘では、3館共同事業として各館の資料をデジタル化してオンラインで共同公開するデジタルアーカイブ事業を進めている。
予算は県の方でつけて、業務は3館それぞれに割り当てられる形で進めている。

《会長》

・デジタルアーカイブを博物館で事業主体として積極的にやっていくか、あるいは他の外部、本庁でやっていただくか。
博物館の収蔵品だから、博物館としてきちっとデジタル化事業を起こすというのが今回の計画での考え方とは思いますが、博物館の予算に関わってくるので、基本計画で機能として明言すべきか慎重になるべき。

《委員》

・和歌山県の例では、指定管理者の業務はどう整理されているか？

《委員》

・指定管理ではなく直営。県庁もかかわる3館直営事業として今年で2年目になる。

《委員》

・（博物館の運営が）もし指定管理者になると相当きつい要件になるのではないか。

《会長》

・指定管理者制度の状況は、奈良県と和歌山県では指定管理者制度の事例はまだない。大阪だけ特化して進んでいる。デジタルアーカイブ事業を指定管理者にする方針もあると思う。

東京国立博物館のような規模だとデジタルアーカイブ化を積極的に、専任課長を付けて人員を沢山入れてやっているが、デジタルアーカイブ化は小さな市の博物館でやる仕事なのかと思う。

《事務局》

・前提として申し上げると、東大阪市の文化財すべてをデジタルアーカイブにするという結論は出ていない。

《会長》

・主な資料だけ文化財課でデジタルアーカイブ化を進めてもらい、博物館では日常管理をするということであれば実現できると思うが、すべてをするということになったら、それで仕事が大きくなってしまう。現実的な事業ラインを定めていただければと思う。

《会長》

・次に、新博物館の機能として大きなポイントになる「協働・交流機能」について、ご意見を伺っていきたい。

・ちなみに学校連携はこの連携事業の中に入ってくるのか？

旧郷土博物館には小学校が授業の一環で訪問されていたということだったが、学校は自主的に来られてた？博物館との協定で行くことになっていた？

《委員》

・埋蔵文化財センターや郷土博物館に行ったりするのは協定といったものはないが、訪問や体験活動の提供などで連携していただいていた。

なるかわの森への散策などと同様に地域の行事や授業の一環での活用という感覚。

《事務局》

・補足すると、学校教育との連携は博物館の基本として当然に求められていると認識していて、教育普及機能として位置づけていきたいと考えている。学校教育との連携は、社会見学のプログラム提供や、学校や地域で出前講座など既に取り組んでいる領域ではあるが、こちらは新博物館でも展示・教育プログラム両面で強化していく。

・「協働・交流機能」としては、「展示公開」「教育普及」「収集保管」「調査研究」の4つのカテゴリにない新しい概念として、博物館の活動をサポートしていただいたり、逆に博物館側が積極的に地域や市民の活動を支援していったり、これまで以上に地域の多様な主体との連携のネットワークを活発にするために打ち出す機能としてとらえている。

《会長》

・これまでも東大阪市の学校はすべて来ていた？今までの学校教育の連携で十分で、今の状態

から更に拡大や発展は考えていないのか。

学校教育の事が博物館機能・事業の文章のなかに十分に表れていないので、学校現場のニーズも把握しながらもっと大きく扱うべきと思う。

《委員》

・メインターゲットに小中学生が入るので、一般的な教育普及の中に含めず、メインターゲットとしてどう訴えるのか重点を置いた表現をした方が良い。

《事務局》

・見学について、現状では学校ごとの選択のためすべての学校が来ているわけではない。

例えば、小学校３年生の单元には「昔の暮らし」があり、小学校４年生では郷土の歴史のなかで大和川の付け替え、小学校６年生では通史として縄文時代からの歴史を学んでいる。

郷土博物館では、毎年３月ごろに企画展として「昔の暮らし」を取り上げ、授業と関連した展示づくりを行うようにしている。新田開発・大和川付け替えの单元に合わせては、博物館だけではなく鴻池新田会所に見学に行くなど、市内別施設と合わせて学校ごとに单元と絡めた見学先の選択肢にしているというのが現状。

《委員》

・小学３年生は郷土博物館の「昔の暮らし」の企画展示をよく見学させてもらっていたが、常設展示ではなく、１月から３月までの限られた時期だけなので、見学予約が殺到して確保が難しかったりもした。常設で学べる要素があるとありがたい。

・大和川の付け替えの話も出たが、私の小学校は鴻池新田まで行くのが交通の便が非常に不便なこともあり柏原市立歴史資料館まで行っている。距離的な問題と、柏原の場合は実際近くに大和川を目の前に出来るという立地もあり選んでいる。

《事務局》

・「昔の暮らし」の企画展は、教科書進行に合わせて、１月ごろにカリキュラムが廻ってくるということで企画展示を設定していたが。このやり方がいいのかどうか、便利だったのかという見直しは行っていく。

・学校のカリキュラムとも併せて、教育普及の効果を出すためにどんな展示の仕方をするのか、立地交通の便として今後使いやすくしていけるのかは設備面を検討するうえでも参考になる。郷土博物館は山の上にあり観光バスが上がれないので、登山して行ってまで「昔の暮らし」を子どもたちに見せるの？という課題も一方ではあった。

・学校現場のニーズ把握は重要と考えている。現在、市内の学校職員にアンケートを予定しており、博物館と学校の連携を進めていくにあたって、こういった展示・活動があれば教育に役立てやすいか、こういった機能・設備があれば利用しやすいか、現場の意見を伺い反映していきたい。

「委員」

- ・教育普及の担当は作らないといけない。

「会長」

・今の東大阪の実態として、来たい学校は来てるけど、来ない学校は来ない。全部の学校を呼び寄せたいというのが本来の意図。来ない学校が来ないままでは子どもファーストの方針に合わない。是非全部来てください。そのためには学校教育との連携を本庁と学校、教育委員会レベルで必ず行くものだという連携をしていただきたい。

例えば、見学としても、社会科だけでなく美術の一環でも来てもらうとか、足しげく通う機会を増やして、一回だけでなく、複数回来てもらうことを前提にしてもよいくらいに思う。

「事務局」

・学校連携は、確かに今までは受動的な面があったが、出前授業や館での体験プログラム提供含めこれまでの活動を下地にしながら更に踏み込んでやっていきたいと考えている。

・また、見学に関しても展示をより子どもたちを含めて幅広い世代にわかりやすく楽しく学べる環境は前提として、設備も含めて見学にしやすい環境を整えていく。

・市文化財課としても新博物館では、小学校の間に必ず博物館に行かないと、東大阪の子どもたちにとってはダメだよねって言っていただけるような博物館をめざすということはベースに考えている。その視点でどういう書き方をするのかは再検討する。

「委員」

・「協働交流機能」について。連携先の確保については、開館がさらに近づいてきて、開設準備段階から関われる場面を作っていくというのが、開設以降のモチベーションとしても大事になる。

・先ほどの学校連携とも重なるが、連携先はもちろん運用していくうえでの人員をどう確保するかが課題と思う。

「事務局」

・本審議会だけでなく連携候補先となる団体や機関にもご意見いただきながら、本計画を人員確保の支えにしていきたいと考えている。

「会長」

- ・商店街との連携というのもあるが、これはどう考えていますか？

「事務局」

- ・今回予定されている瓢箪山エリアに関わりのある団体や、さらに広く市全体、観光協会も

含め、新博物館に関わっていただけそうな団体とは早い段階、今回の基本計画の段階からもヒアリング、意見交換をして連携方策を練っていきたいと考えている。

・具体的には、瓢箪山駅を降りて現在の埋蔵文化財センターに行くまでに、ジンジャモールという通称で知られる商店街があるが、そこはまちづくりに熱心なのでこういったことを博物館と一緒にやりたいかを話したい。いろんなアイデアを地域からもいただきながら具体的な協働・交流プログラムの案として記載していく。

《会長》

・個別でそれぞれの団体にヒアリングに行くということですね。大学は近畿大学などを想定されている？

《事務局》

・近畿大学とは、協定にはまだ至っていないが今年度から新博物館の機運醸成を進めていくということで、すでに連携を始めている。今月も歴史体験フェスティバルというイベントを実施する予定だが、こちらも新博物館に向けた機運醸成を図るためのイベントとして展開している。

・近畿大学文芸学部からも、学部・文化歴史学科としても連携したいとお話をいただいているので、近畿大学にもヒアリング予定。

《会長》

・観光系の大阪モノづくり観光推進協会というのはどのような団体？

《事務局》

・大阪モノづくり観光推進協会は、民間団体。全国各地からの修学旅行を東大阪で受け入れる窓口をすべて担っており、事前に修学旅行の受付をして、ここから各町工場の受け入れを手配したり、そうしたハブになって活動している団体になる。

以前より、東大阪のものづくりを語るうえで、東大阪の歴史をしっかりと伝えたいという町工場に連れていきたいが、郷土博物館が観光バスが入れないので利用できないという意見を伺っていた。東大阪のことを知らずに町工場に行くよりは、東大阪モノづくりの系譜を学んで町工場に行く方が学びが深いということで、こちらは新博物館開館後も積極的に活用いただく連携ターゲットとして位置付けている。

《会長》

・博物館で団体受け入れの準備をしてから現地に向かう見学起点としての活用連携を見据えているということですね。団体受け入れの取り扱いは博物館でも市でも手間暇のかかる大変な事業ですが、そこで連携していただけたらと。

《事務局》

・修学旅行生が一番多いときで年間 7000 人くらいの受け入れをしている。

東大阪の町工場を見学しモノづくりの歴史を学ぶプログラムの中に、新博物館の見学を入れていただきたいと思っている。

《委員》

・新博物館にバスが駐車できるスペースも必要になりそうだ。

《事務局》

・そうした利用も想定し、施設としては観光バスを 2～3 台置けるようにしたいと考えている。動きとして民間団体が実現していることにこちらから連携させてもらうという話になるので、団体側の意向も聞いて協働方針は固めていきたいと考えている。

《委員》

・ボランティアや市民の活動を支援する形で意見を取り入れるのはいいことだと思う。

《事務局》

・ボランティアについては、大西委員の観光協会で開催されているまちガイドボランティアの皆様など、すでに東大阪市で思いを持って活動されている方々にも、ぜひ博物館のボランティアに協力いただければと考えている。

新博物館はフィールドミュージアムというコンセプトも持っている。まちガイドボランティアは毎年まちを歩いてマップを作るといった、まさにフィールドミュージアムそのものの活動を現状もされておられますので、ぜひ博物館の活動に協力いただいたり、博物館側が活動をサポートしたりといった連携をとっていきたい。

《会長》

・ボランティアルームのような活動の場所は置かれる予定か？部屋が狭くなったら活動も狭くなる。

《事務局》

・ボランティアの控室となる場の確保は認識している。

《トータルメディア》

・予定立地に建築を立てるとして、どれくらいの広さがとれるかの検討を進めている。具体的なボリュームが取れてから優先順位は明確になっていく。例えば、必要最小限の控室は確保しながらも、活動の場としては講義室などの兼用も含め検討する必要があると考えている。

《会長》

・先ほどの学校教育との連携やキッズコーナーとか出てきますと、それぞれの特定の部屋が必要であるということになる。展示室も資料の表では、4種の部屋が確保されているようだが、この使い分けは活動に応じて具体化されていく考えか。

《トータルメディア》

・現状資料では、展示公開機能に応じた部屋としては、展示準備スペースを除くと4室、ガイダンス展示室・常設展示室・子ども展示室・特別企画展示室という形で分けて表現している。基本的な機能として、こういった要素は入れていく必要があるだろうということで表にまとめている。

一方で、例えばガイダンス展示室と常設展示室は、場合によってはワンルームの中に共存するといった可能性も含めて、最終的には展示計画を踏まえての流動的な検討になります。今の展示のエリア分けの機能としては、ガイダンス展示室で、最初に東大阪市の環境や歴史の流れを基本情報として大つかみしていただくような展示からスタートして、常設展示室や特別企画展示室を見ていただくという流れは必要になるかなと思っているのでそちらの考え方でまとめている。

《会長》

・博物館の展示に大事な動線を踏まえて考えて詳細化していくということで理解しました。

《委員》

・新博物館は全体でどれくらいの面積がとれますか。必要な機能・部屋をリストしていくことは必要ですが、部屋の種類が多すぎると各室も狭くなる。

《事務局》

・総面積は現在簡易測量を行い、建物ボリュームの検討を進めているところであり、次回以降に詳細ご提示の予定。

・資料の諸室機能の表については、これまでの埋蔵文化財センターや郷土博物館での活動を踏まえて、こうした機能を持つ部屋を置いていきたいということで検討している。規模の具体化に合わせて、部屋の機能の兼用や別施設への移管を含めて検討していく。

《会長》

・自身が主体になって作った前回の文化複合施設計画の際にも、実際はほしい機能からかなりそぎ落とした。階数にもよると思うが今回の土地の広さでは、常設展示室と企画展示室、2部屋出来る、そんな面積ではないと思っている。学芸員の展示替えて対応するしかない。学校がいつでも見学に来れるような常設展示のスペースを確保できるような規模の施設を整備できる計画として、強い理論武装をしたうえで、事務局も予算確保に頑張っていただきたい。

《会長》

・ここまでのまとめとして。本日の議事内容も踏まえながら、事務局の方で意見をまとめて計画の修正・具体化をしていくということで、事務局よろしいですか。

《事務局》

・ターゲットから機能に至るまでご意見いただきました。

また、ターゲットが決まらなると諸室も決まらないので、本日いただいたご意見を事務局でまとめ、次回にはターゲットへの働きかけをより明確にしながら、次の段階、展示計画や諸室の詳細構成に進めたらと思う。

《会長》

・ターゲットは審議会側から改めて提案するのか。それともターゲットの選択は事務局が行う？

《事務局》

・事務局としての考えは今回の資料で提案した案になるが、本日の意見で決めきらない部分含め、次回にはより詰めたものを提示したい。最終的には事務局で皆さんのご意見をいただいたうえで決めさせていただきたい。

《会長》

・審議会の発言全てが反映されるわけではない？

《事務局》

・事務局と先生方の意見が全会一致としてとれた内容については反映する。

《会長》

・本日の議論をもとに事務局が選択し、それを次回提示していただく。

もし、その中で抜けてしまっていて入れるべきという内容があれば、3回目の審議会で委員の皆さまに発言をお願いしたい。

3 その他

《会長》

・ 前回の審議会では郷土博物館と埋蔵文化財センターで文化財現物を視察。
それを基に、本日は主要な文化財資料一覧を事務局から提出いただいた。次回、博物館の展示計画を審議いただくにあたり必要となる資料なので、事務局から説明をお願いします。

《事務局》

・ 所蔵資料点数についての資料と、東大阪の時代ごとのトピックとなる主要な文化財についての資料をお配りした。
・ 資料種別として、旧石器時代～鎌倉・室町の中世までの考古資料を多く所蔵している。江戸時代以降になると、埋蔵文化財資料はほとんどなく、文書資料や民具資料が中心となる。民具資料のテーマとしては、東大阪の産業として根幹的な歴史のテーマになる河内木綿関連資料や水車産業をメインに想定。
また、これまでの博物館では、展示として活用する機会が少なかった美術工芸のトピックも資料点数は少ないが新博物館では展示していきたいと考えている。
本日資料は所蔵する展示予定資料の概要としての説明となるため、次回以降提示する展示計画の中で詳細意見は伺いたいと考えている。

《会長》

・ 郷土博物館を視察した際、一部資料がケース内に展示されたままになっていたが、今後撤収して別のところに収蔵する予定はあるのか。

《事務局》

・ 現状は展示状態で保管。今後の収蔵計画のなかで、新博物館に移行する資料、場合によっては移転後の郷土博物館の建物を活用する中で一部展示利用していくかも考慮に入れながら考えていく。

《会長》

・ これまでの郷土博物館では1年間に展示替えは何回されていたか。

《事務局》

・ 展示替えは年に4回実施。春・夏・冬に企画展を3回。春は「ものづくり」、夏は「トピック、季節に係る年中行事」、冬は小学3年生の「昔の暮らし」に合わせた展示という構成。秋は特別展示として、学芸員の専門分野に合わせて東大阪の地域に特化したテーマを設定した展示を行ってきた。

《鈴木会長》

学芸員の専門は考古？特別展も考古関係だったか？

《事務局》

・過去に3人いた学芸員の専門分野は全員考古だった。特別展に関しては、様々な所蔵資料を活用するという形を込めて、出来るだけ考古に限らないテーマを設定して行っていた。ただ、文書関係の資料については、専門家がいなかったので展示することは出来ていなかった。

《会長》

・郷土博物館のケースに残っている資料は東大阪の歴史のテーマ展示になるのか？

《事務局》

・通年の常設展示である東大阪の通史展示と、冬の企画展である「昔の暮らし」展示が残されている状態。

《委員》

・（小学校での見学では、）春は埋蔵文化センターに、秋は柏原市立歴史資料館に、冬は郷土博物館に訪問してた。

《会長》

・視察中に、河内木綿のコレクションが大阪府内では一番群を抜いていて、収蔵品の目玉であると同った。それを特化したテーマで売りにするとすると少し地味だろうか。
また、毎年の特別企画展示でカタログは作っていたか？

《事務局》

・特別展に関しては、毎年展示解説の冊子として図録を制作。ほかの3回の企画展については、見開きA3か両面A4の解説シートを作成し配布していた。

《会長》

・活動の姿として見えてきていなかったが、これまでは指定管理者制度の中で行っていたのか。

《事務局》

・昨年の休館まではその形（指定管理者）になる。

《会長》

・村上委員に伺いたい。小学校で郷土の歴史を学ぶときに、社会科の副読本として東大阪の歴史がわかるような副読本はあるのか。事務局に聞いてみたところ、特別には作られてないようだが。

《委員》

・副読本というか東大阪についての3・4年生向けの社会科の教科書がある。その教科書で、東大阪の社会や暮らしについて学ぶ。全国の教科書も配られるし、その中に東大阪のことが載っていることもあるが、子どもたちの大部分はその東大阪市版の社会科の教科書を中心に学んでいる。

《会長》

・東大阪の歴史が最初から最後まで記述されているような書籍ではない？

《委員》

・「東大阪市」のことを学ぶ社会科の教科書であって、歴史に限った教科書ではない。商店街や警察消防だったり、地域の産業だったり、社会や暮らしをメインテーマにした单元。高学年の歴史の教科書は東大阪に特化したものはないので、(通史としての)東大阪の歴史が書かれたような教科書はない。

《会長》

・新博物館では歴史の展示が必要になるので、東大阪市の歴史についての子ども用の概説書が必要だなと感じます。子どもファーストっていうからには、イチからテキストを作る必要があるということを提案したい。

東大阪の場合は、市史が編纂されていないので大人向けであっても歴史が概観できるテキストがない。学校の先生自身も東大阪市の歴史を扱おうとするときに参考書がないのではと思う。

展示、博物館展示は資料を中心に见せていくということもできるが、骨になる部分が明確でないのは新博物館をつくる上ではネックになると考えている。学校教育でもそういう切実感はないか。

《委員》

・例えば、縄文時代の事を学んだ時に、そのとき東大阪ではこうだったと結びつける学びというのは正直言ってなかなかできていないのではないかなと思う。

展示品も今日の資料に載っていた河内木綿の立派な着物も見てないし、学校側でこれを見に行こうというのもこれまではなかった。

《会長》

・しばらく展示できていない資料もある。学術レベルの話で、これまでのアピールも足りないし、研究者もいないっていうのもあるかもしれない。

展示の構想を練っていくうえでテキストがないことで、トータルメディアさんも困っておら

れないか。

《トータルメディア》

・東大阪の歴史、古代から現代までを語る全体的な軸として、来てもらったメインターゲットの子どもたちにどういう情報や感想を持って帰ってほしいのかを設定するうえで、まとまった情報があるとテーマ設定の助けになるが、既存の物としてないので、そこは確かに難しいところ。

個別テーマとしては、本日も話題に出たような鴻池新田や河内木綿といった、展示できる収蔵品がある重要なトピックはいくつもあると思う。

展示を構成するうえでは、あくまで収蔵品がベースになると思っているので、各論としてはこの収蔵品であればこういう見せ方をするといったところを踏まえながら、展示室全体の軸として、こういったテーマ設定がよいのか、事務局と協議しながらお出ししたい。

《委員》

・学芸員の方、考古専門が多いとは聞いていたが、モノづくりにつなげるという意味では、近現代史も重視してほしい。

東大阪には古くからの街道も多く、それが次第にバスになり鉄道になり産業が広がる。加えて大和川の付け替えによっても産業が変わっていった。

江戸時代に河内木綿の関係の資料があるようなので、そこから近現代の産業の移り変わりを語っていくのもよいのでは。

《会長》

・近代のテーマを膨らませていくのは私も同感。

《委員》

・最初、展示室規模がそう大きくない小規模なものとして、東大阪らしい博物館としてテーマを特化していくのであれば、「街道」はキーにできそうだと感じていた。信仰の道、交流の道、道を通じた発展、道を通じた遺跡、道を通じた文化財、そういうのをテーマとして展示すると、歴史の流れがわかるような展示と一緒にトピック展示として考えていけるのではないかな。

もちろん、展示室の広さが十分に取れるのであれば、通史展示含め各個別テーマの展示を広げて深めていけばよいと思う。

《会長》

・「東大阪市の歴史に誇りを持つ。」市長があえておっしゃっていた。東大阪の歴史はこうだ、知って誇りが持てる、郷土愛が生まれていくんだ、そういう展示をめざす。

具体化する場合に、東大阪では何ができるか、展示品で言うと河内木綿だとしたら、どういう手法があるのか、その辺は河内木綿の研究者の視点も必要になってくると思う。

事務局の方では展示はどんなイメージで？

《事務局》

・学芸員と構想を進める中で、常設展示では通史を基本としながらも、ただ順番に歴史の出来事や資料を見せるのではなく、通史の中にもテーマを持たせていく構成が必要と考えている。

・（これまで展示できていなかった）膨大な収蔵品もあるので、例えば河内木綿であるとか交通の変遷についても、常設展示だけでなく企画展示を最大限活かして、資料公開を進めていきたい。

・今は休館中ですが、鴻池新田会所という施設もある。鴻池新田会所にゆかりがある資料はそちらで展示するという考え方も持っている。新博物館だけでとどまるテーマじゃなく、（東大阪市のフィールド全体で）施設ごとの住み分けも考えながら、テーマは設定していきたい。

（他施設に対して、）博物館が学芸的な指導をするのかなど先々の課題として検討すべきことは多いので、内部で検討したい。

《会長》

・次回は具体的な展示構想も出てくると思うので、展示に対してのご意見も委員の皆様にも求めたい。

本日の案件は終了とする。

4 閉会